

## 壺井栄論 (22) 第十章 流行作家 (一)

A Study of TSUBOI Sakae (22): A Popular Writer ( )

鷺 只雄

SAGI Tadao

### 一 一九五二年後半の小説 さまざまな試み

次に一九五二(昭27)年の残りの小説にふれておくと、「落花生」(52・3 「婦人公論」 全に未収・新全集に収録)では戦後の若い世代のアブレぶりを挑発的に記して読者を呆れさせ、「若いいのち」(52・3 「キング」 新全集に初収)では先日見た終電での「コマ酔った若い男がからみ、窓から顔を出す、その危うさ。せんだっても酔った会社員が犬死したというが、もっと生命を大事にしてほしいと呼びかけ、「かんざし」(52・4 「群像」 単・作・全・新全集に収録)は女流作家であることと主婦であることの相克・矛盾からの夫婦喧嘩や自己嫌悪を指摘して以後に増えてゆく 芸術家小説のさきがけとなる。「謀反気」(52・7 「文芸春秋」 単・作・新全

集に収録)もその周辺にある問題を扱った作品で、一言で言えば男と女との矛盾 一つには夫婦で働いて、夫婦の名義で借金して建てた家でも、出来た家の名義は夫婦二人にはなれぬ不合理さ(戦前の法体系ではそうであった)、もう一つは女流作家三人で銀ブラ後、男なら一杯となるのにこのまま帰るのは癪と謀叛気を起して新宿で電車を降りて飲み屋の一軒に首をつっこむが「なんですか」と言われて二の句がつけず、ひき下る顛末を通して、女をつまらなさ、古風な女をひきずっている自分をつつき出して苦笑している。

「ピアノ」(52・8・25 「別冊文芸春秋」29号 単・作・新全集に収録)は最近私の家に入ったピアノの入手経過を記す中に、戦争で息子を奪われ、財産を奪われ、今また形見のピアノを奪われる老夫人の悲惨な運命を辿り、他方父から兄、栄へと続く鳴り物好きの家系(父は笛・太鼓・三味線何でもござれの名人で、殊に近村寄り

あつての浄瑠璃大会には独学故にいつも露払いではあつたが、「父の浄瑠璃が一ばん聞ける」と評判であり、子供たちの中でその血を一番引いたのが長兄であり、彼は音楽学校への進学を希望したが、父・母・きょうだいから村長までが総出でよつてたかつて希望の芽をつみとつてしまい、夭折してしまつた。栄は郵便局に勤めてはじめてためた小遣いで買ったのはハーモニカという音楽好きの血の中に生まれたのが文吉で目下ピアノの稽古中を配して血の歴史の正当性を主張し、更に宮本百合子（作中では「M」と略称するが百合子であることは明白）に対する批判（ピアノなんかのあるブルジョア家庭出身で、そういうものばかり書いている百合子の文学は労働者には用がないというもの）に反論する形で「ピアノを私たちのためにも獲得しなくちゃ。そこに今日のたたかひがある」と自己弁護するのだが、そういう弁解自体が不要にもかかわらず、配慮するところにわざとらしさがあり、主題をはつきりさせない憾みを残している。

「名士」（52・10）11、53・1「小説公園」 単・新全集に収録（は島の小百姓の三男丑松が名門時枝家の跡取りの妹久江の婿になり、時枝醤油の重役、村会議員からやがて県議となる。村会議員の頃から知り合つた小料理屋の小竹には三人の子まで産ませながら認めもせず、金も出さぬため、小竹は産婆となつて因島へ行き、再出発を期す。久江はガンで大阪の病院に入院するが手遅れで今日明日という状態の所へ丑松の電報で小竹が呼び出され、久江が死んだら後へはお前を直すといわれる。しかし、殊勝らしく久江の枕辺を毎日見舞いながら、それ以外の時間は小竹のそばを離れない丑松と、そこから逃げ出しもしない自分にもあいきが尽きた小竹は久江の遺

体を火葬場へ運んだ留守に因島へ帰る。丑松から後妻に帰れという手紙をもらつた時、小竹はつわりで寝ていたが、四人目はもう生むまいと決心した。

ここには貧窮から身を起こす男の屈辱の人生と、性の力と虚名にふりまわされる女の哀れさという二つの主題がどちらもそれ以上深められぬまま、中途半端で放棄されてしまつたため、これらの主題は今後の課題として残され、探究されることとなつたのである。

「新陳代謝」（52・11）「文芸」 単・作・新全集に収録（は栄の夏の定宿とした上林温泉の塵表閣と更にそこから紹介された山の湯旅館とのかかわりを描き、去年、今年と相次いで亡くなつた双方のおかみを追想し、わが身の不健康、衰えを痛感するという掌篇。

## 二 一九五三年の小説 秀作「月夜の傘」

「はしり」の唄」（53・4）「群像」 単・作・新全集に収録（「はしり」というのは台所の洗い場の意味で、母の時代にはそこは家人に隠れて生卵を飲んで七人の子を生む氣力を養つた場所であり、子の時代になるとできのいい三男は東京の学校を出るが、治安維持法違反で警察につけねらわれ、やれ家賃だ、保釈金だと始終無心をそこで繰り返して、嫁の手に金が渡される場であり、三代目の若い孫嫁にとつてそこは坐つて仕事をやるから腰の曲がる元凶の場所故に台風でもきて吹き飛んでくれることを願うというように、はしりをめぐる三代の旧家の嫁の意識の変化を辿つて不合理なものへの反逆、栄のこの前後の愛用語で言えば謀反を引き出している。「手唄」

(53・8 「小説公園」 新全集に初収)は既出の「村のクラス会」(49・4 「銀河」)同様、作者の故郷小豆島の同級会に材を得たものと思われるが、テーマは一人の旧友にまつわる愛と憎しみの情で、クラス会の幹事役をして走りまわったマサエは同級生で従妹の光ちゃん(光)の死を次のように嘆く。光ちゃんは旧家の一人娘で村でたった一人県立女学校に行ったのだが、縁談でつまずいたのがもて生涯独身を通し、爪に火をともしようにして暮らし、死の準備万端をととのえて(夏と冬の二種類の死装束を用意し、お寺へあげるものを準備し、形見分けは一々紙に包んで整理し名前が書かれていた)ポツクリ死んだのに対して抗議する。そこまでしななければならぬのか? そんなことまでして人にほめてもらわなければならぬのか? 物事にはほどがあり、それができぬ者は物笑いになり、すりゃ、はた迷惑というものだ! と文句をつけ、栄と二人墓前に参り、昔の手毬唄をうたいながら、道楽の一つもさせてやりたかった、何のために生まれてきたのかと嘆くというもので、愛憎入り交じったアンビバレントな感情が印象に残る一篇。

「月夜の傘」(53・8 「オール読物」 単・作・全・新全集に収録)は四十そこその妻たち四人(女学校が同じだったという縁で先輩からの紹介で同じ町内に格安の値段で家が入手できた)が、戦争の一番の被害者は私達の世代なのだから、たまには夫に謀反気もおこし、「主人をお尻にしくみたいな会」を作って月に一度は羽根を伸ばそうということになっての内憂外患をユーモラスに描いた秀作で、昭和二十年代の後半期に確かに存在したある世代の女性達の心情を巧みにすくいあげた作品であり、同時に夫の武骨さ、感情表出の不器用さを排しながらも愛すべきものとしておおらかに描いて

いて余韻嫋嫋たる作品となっている。佐々木基一は佐多稲子「黄色い煙」と一緒に栄の「月夜の傘」を評して二人とも「さいきんいちばん脂ののった仕事をしている作家である。二人ともほとんど円熟期に達したといっているいいほどで、どんなに身近な日常の材料でもみんな小説になってしまふ」(「読書 佐多稲子「黄色い煙」壺井栄「月夜の傘」54・10・8 「産業経済新聞」というが適評である。

脳病院を舞台の力作 「紙一重」(53・10・25 「中央公論秋季増刊文芸特集号」 単・作・全・新全集に収録)は義弟戎居仁平治から当時彼が勤めていた西熊谷病院(精神科)の異副院長を紹介されて度々取材に訪れたが、一年ほど胸の中に抱えて吐き出せずにいた。ところが偶中央公論社を訪ねた時に編集長の藤田圭雄につかまり、そのまま信州の宿、「山の湯」にカンツメになり、四日間で百十八枚書いた。枚数は勿論栄のレコードなら、二晩の徹夜も初めての経験であった。あとは腑抜けのようになって二三日を寝て過ごした。初版刊行時(54・12・15 「紙一重」 中央公論社)に改訂し、百二十枚が百六十枚になり、単行本の出版も一年近く延ばしたが、のばし甲斐のある程の変化ではなかったと自ら記しているが、これは後述するように概ね首肯されるところであろう。

作品は東京近郊のK町(埼玉県熊谷市と思われる)にある脳病院を舞台に展開する。まずそこにおける問題として第一に患者の過剰收容の問題、第二に一人の医師が百人のものの患者を診ざるを得ないという異常事態をとりあげて問題を広く世間に訴えらるゝと共に、第三に患者の様々なケースを具体的に紹介することで読者にこの病気と病院への理解と関心を身近なものにしていると思われる、その点で作者の準備は周到である。次いで「二」では東大卒ながら失業中で、

42歳、高校生をかしらに小三までの三児をかかえて細君の編物で生計が支えられている中里一家が点出され、一家の苦勞に同情した脳病院の息子夫婦から父の脳病院への就職を紹介されての中里一家の驚き・当惑・見栄・差別等々の葛藤を描いて脳病院に対する当時の偏見・差別的感情をえぐり出し、白日の下にさらけ出している。ここで重要なのは中里の半生を暗黒にした左翼運動への加担の問題があり、それはいわば若気の至りとも言うべきはしかの如きものであったのだが、中学教師志望の彼には常にそれが、前科者 の烙印として決定的に働き、はじき出すものとして作用したということである。これは後述するように、代議士襲撃事件の容疑者としての逮捕にもつながっている。

もう一つは「四」で院長の人情主義の勝利を示すものとしての前島一家を登場させていわばダメ押しとして使っていることである。

「三」では患者のいろいろを再び紹介するのだが、これまでと違うのは発症の原因にまでさかのぼって警鐘を鳴らしていることであり、さらにはこれを逆手にとって道楽者の夫が妻を無理矢理入院させることによって、狂人の準備工作をし、離婚のための既成事実作りに奔走するという場合や、治つても先行がなく、院長の人情で生漕置いてもらっている者など、単に医療の問題ではなく、尋常一様では解決のつかない、巾の広い問題のあることも示している。

「五」では現金強奪と脱走事件、更に殺人と凶悪な事件が連続して起り、それまでここは浮世を離れた別世界の如き観があったが、それはあくまで錯覚であって、この世界こそ世俗の縮図であり、また欲望や感情・情念がさえぎられることなくストレートに表出される場所であることをまぎれもなく示している。渡部と中里の逮捕も

理不尽な世俗の象徴としてあるのであろう。

図式的に言えばこの作品のテーマは脳病院の置かれている危機的な状況への問題提起であり、小説的な結構としては理不尽な現実とそれに対峙する多木院長の人情主義、博愛主義の敗北を描くものと言つてよいであらう。

その点で作品はほぼ当初の目論見は達していると見られるが、ラストの二人、渡部と中里の逮捕は余りに理不尽、オソマツに過ぎるもので、結末をつけるための口実との非難も甘受せざるを得ないであらう。

### 三 一九五二年の児童文学 戦争の傷跡

次に一九五二（昭和27）年の児童文学について述べておきたい。

「小犬のペーちゃん」<sup>5</sup>（52・1・13「高知日報夕刊」他 単・児童全集3・新全集に収録）は小学生の道子が学校帰りに知り合ったおばさんから四匹生まれた子犬のうち一匹をもらうことにしてペーと名づけ、乳離れしてから連れてくることにするうち病気になる、やせてほかの犬よりもかわいくなる。するとおばさんはほかの犬にしてもよいとすすめ、道子はその気になるが、母に、犬の子だからって、かってなことはだめ。うちの犬はペーです。ときつい目で浅はかさを叱られるというもので、人間の身勝手さや御都合主義をいませている。

「山羊のおよめいり」（52・3・23「小学生朝日」朝日新聞社 毎日曜日発行 児童全集3・新全集に収録）はチ力子の家の山羊が

発情期を迎えて騒ぎ出し、父が交尾のために連れてゆくまでの過程を、子供にわかるように説明することは困難であることを、栄は実到手際よく、いやらしさは微塵もなく、さりりと述べているのは流石である。「ネジのゆくえ」(52・4・22)「中国新聞」 兒文全集3・新全集に収録)はススムの家ではリフォームで二階に部屋を造ることになり、大工さんが入ったのでススムは二階に上がって見るのが毎日の楽しみとなるが、母は危険であるのと邪魔になることからりっぱな機関車を買ってきてこれをあげるから二階には上がらないでと約束させる。所が隣のタケシと遊んだあと機関車のネジがなくなっていて、しかもまわりは暗くてわからない という尻切れ蜻蛉の作品。「金太郎」(52・5・5)「神戸新聞」 兒文全集3・新全集に収録)は金持ちの神田家の四匹の鯉のぼりがゆったりと五月の空に舞う姿と対照的に隣家の小さなバラックの家、父が戦死して母一人一人の八百屋の貧しい行商一家を配して、こちらには子供の描いた用紙のぼりと金太郎の腹巻姿の幼時の写真を飾って満足する母子の姿を描いて、幸福はどこにあるかを静かに問いかけている。「たのおけ病院の看護婦」(52・7・3)「時事新報」 兒文全集3・新全集に収録)は父は戦死、母は小豆島の疎開先で亡くなり、みなしことになった光子(中一)は血はつながらないがひきとって世話をしてくれる樽職人のおじいさんが修繕するたのおけの配達役を引き受け、その姿を村の子供たちにはやしたてられて恥ずかしいががんばり、将来は看護婦になるつもり。「このおじいさんには」「おひつや たらいを なおします。 山田たるおけ病院」と書いた貼り紙を村の辻々にはりだすユーモアのセンスがあり、それが作品の救いになっている。「文ちゃんと直ちゃん」(52・9・7)「河北新報」

新全集に初収)は同い年の小学二年生、しょっ中けんかと仲直りのくりかえしなので、母どうしが話して一週間しなれば百円ずつやることにする。七日目の夕方、もう二人とも、がまんできない、百円なんかいらぬといつので、母はさあやっつらっしやいと95円やり、どうしてすくないかは二人で考えなさい、とするのだが、この試みそのものはおもしろいと思うが、それで解決しないことは明白であることからすれば方法論の間違いということになる。

「カキはみていた」(52・10・21)「新聞名不詳」 兒文全集3・新全集に収録)は八歳の少年が三つなつた柿の実を戦死した父の命日に食べるのを楽しみにしていたところ、その朝戦争で孤児になった少年に三つとも食べられてしまったという残酷な話で、戦争の悲惨さ、その根の深さを訴えたい作者の意図は明瞭だが、明瞭すぎたかえってウソっぽくなつていないとはいえないのではないか。「水そうの中の子供」(52・12・7)「神戸新聞」 兒文全集3・新全集に収録)は小学生の花子が隣の産婆さんが留守の時には四歳と二歳の子の面倒をみてやるという話であるが、これがシリアスであるのは彼女の夫が戦争で片足をなくし、しかも復員以来病気がちのため、家計の負担は全て彼女にかかり、更に去年夫が死んでからは仕事で留守する時には子供を見てくれる人がいないから、二人をからの防火用水の中に入れて出かねなければならぬからである。そういう複雑でシリアスな状況を巧みにとりこんで一篇にまとめ上げる手腕は凡手ではない。

四 一九五三年の児童文学 佳作が多い

このあと栄は流行作家となり、児童文学の方へは手がまわせなくなつて急速に児童文学は絶えるのでそれを先にたどつておきたい。

「千歳万歳のおじさん」(53・1・1「信濃毎日新聞」 児文全集3・新全集に収録)は当時、正月になると大黒天のいでたちで打出の小槌を手にもつて家々の門口に立つてめでたい歌をうたい、舞をまつて餅などをもらった人のことだが、戦争がすんでからは彼はそれをやめてしまった。一人息子が戦死して一人ぼっちになつてしまったからである。しかし、おじさんがまた歌をうたえるような世の中が来ることを望んで終わる。「遊びにくるクマちゃん」(53・5「婦人倶楽部」 児文全集4・新全集に収録)は母が三歳の幼児タケシをねかす話だが、実に上手に、上品につくつてある佳品。「赤い柄のこつもり」(53・6・10「神戸新聞」 新全集に初収)は雨の季節に小一の文吉は外へ出ようと傘立てを見ると赤い傘が二本しかないの、一緒に遊んでいたタミコに聞くとこの赤は私のもとと言われてグウの音も出ず、それでは学校から間違えてもつてきてしまったかどがっくりする。ところが姉からさつき郵便局に行つた時に文吉の黒傘を借りて帰りに破けた赤い傘にとりかえられてこめんとあやまられて自分の失敗でないことは判明するが内心の葛藤からお姉ちゃんのはか、といつて泣く。自分の落度でないことは証明されたのだが、しかしそこまでの内心の葛藤は爆発させないとおさまらない心中の経緯を描いたものでよく幼児の心理を辿つている。「おかしな話」(53・6・28「日本経済新聞」 児文全集3・

新全集に収録)は鶏肉の嫌いな文吉に、今日の肉はがしわだと言つてうまくこまかして食べさせてしまふ話だが、その手際は鮮やかである。「雨のふる日」(53・8・17「時事新報」 児文全集3・新全集に収録)はまもなく文吉が一年生になる前に養子縁組をして正式の親子になつておこうと手続きを進めていたところ、それが認められた日、文吉は朝から大騒ぎして出かけ、無事養子となり、正子とは姉弟となつた。三年生になつたある日、森君から文吉の母についてしつこく「ママ母」「ニセの母」と言われるが、彼にはそれをつっぱねる強さがそなわつていた。「養子」にまつわる永遠の問題が手際よく回避されて、困惑することなく対処されている好例。「あしたの風」(A 児童・夏子もの)(初出未詳。「あしたの風」(創作・随筆集)「53・1・20 全日本社会教育連合会」に初収・新全集に収録)は小六の夏子は弟と母の三人暮らし。父は戦死し、母の編物で生計を立てるが、生活は苦しく、長ぐつはなかったがやつと買つてもらつてはいて行つた日に盗まれてしまい、家に帰れないどころへ母が迎えに来て、また買つてくれ、夏子の心配を吹きとばすように、「あしたはあしたの風が吹く」と大きな声を出す。庶民の生活の知恵 今日の心配はあしたにはもちこさない、あしたはあしたで、あたらしい気持ちで生きてゆくという庶民の気持、生活の知恵を一篇にまとめたものだが、余りにも都合主義のそりりはまぬかれないである。「歌のちかく」(初出未詳。「あしたの風」(創作・随筆集)「同上に初収。新全集に収録)では郊外の私鉄の駅付近の様子をスケッチし、「ながぐつ」(初出未詳。「あしたの風」(創作・随筆集)「同上に初収。新全集に収録)の松雄(九歳)とヨシミ(七歳)は今迄両親と四人で四畳半一間に住んでいたのが、今度六

畳と四畳半の畑の真ん中にある一軒家に越したので大声を上げて喜ぶ。大人用の自転車をねだると母は銀行のくじびき貯金に毎日十円ずつ貯めることを提案し、二人も大乗り気。千円たまった日に、母は長靴を二足買って来て玄関に並べ、二人に長靴が当たったよと言うと、これでいいよとはいって遊びに行った。なかよし一家のおもいやり生活点描といった趣の作品だが何とも予定調和的でキレイゴトにすぎよう。

次は一九五四（昭29）年から。

##### 五 一九五四年の児童文学 「黄色い包み」は佳作

「さざんかの花咲く道で」<sup>7</sup>（54・1・1）「中国新聞」正月版第三部二面。新全集に初収）は母と二人暮らしで保育園に通っているケイコは大みそかの晩にいなかのおじさんからみかんが沢山届き、お正月の晩に母と競争でミカンを食べ、隣のおばさんが来ると更にやめられず、食べたまま眠る。夢の中でおしっこがしたくなり、すますとこたつの中で失敗したことに気がつき泣き出す。誰でも一度や二度はあることですからそっとしておいてあげましようとお大らかに結ぶ。

「えくぼ」<sup>8</sup>（54・1・23）「読売新聞夕刊」 児文全集3・新全集に収録）は一年生の時からクラスの誰とも口をきかないミー子の相手になってほしいと担任の清水先生から頼まれた初子はその日から席がミー子の隣に変わった。母からは「初子ならと信用」されたのだからしつかりおやりと言われ、翌朝登校のさそいの声をかけると、

母に呼ばれて出てきた初子はうれしそうに笑いかけ、はじめてみせるえくぼをつくっていたというもので、何年も口を利かない重症の患者がいと簡単に笑い、えくぼを見せるというのは何と言っても眉唾物の感があつて都合主義の非難は避けられないであろう。

「まないたの歌」<sup>9</sup>（B 児童・文吉もの）<sup>10</sup>（54・6・8）「東京タイムズ」 児文全集3・新全集に収録）は昨夜、夜ふかしをしたので母に何度も起こされても起きられない文吉はおなかを痛いとうそをつく。すると母は、じゃあ今日はお休みね。けどせつかくおべんとうにサンドウィッチをつくったのに食べられなくてかわいそうとうそを見抜いている。やがて文吉が起きると朝ごはんのほかにサンドウィッチまでできていたというもので、一枚も二枚も上手の母にしてやられた文吉を描いてほほえましい。「黄色い包み」<sup>11</sup>（55・1・1）「河北新報」19面。共同通信から他紙にも配信 児文全集3・新全集に収録）は生母をなくし、新しい母を迎えた小三のヒロミがうれしい心を言えないばかりか、おかあさんとも言えずに過すうち、はじめて「おかあさん」と呼んだのは二人で買物に出る電車で帰る時ヒロミが乗るとドアがしまり、母が外にとりのこされて電車が動き出した時であった。ヒロミの心の動きもよく描かれているし、状況設定にも無理がなく、うまくできた作品。

##### 六 一九五七年以降 長篇児童文学の展開

栄の場合、流行作家であることは同時に長篇小説家であることを意味した。それは児童文学の場合も同じで、作品数は激減するが殆

どが長篇となるので、以下一九五七（昭32）年以後の作品を一括して見ておくことにしたい。

「まあちゃんのおうち」（57・1）58・6「たのしい一年生」「たのしい二年生」「たのしい三年生」に全18回連載 児文全集4・新全集に収録）はひとりっこのまあちゃんの手相にひよこのびよきを飼い、ついで犬のモリー、猫の白と次々に飼うことになって賑やかとなり、田舎のおばあさんのお見舞いに行つた留守に白が失踪し、やっと見つけて一安心。小三になったまあちゃん組にふじ川ふじ子さんという転校生がきて隣の席に坐るが口が重く、無愛想。やき芋屋で赤ん坊をおぶつたふじ子に会い、並んで帰るとけやき大臣の家に消える。翌日、登校の声かけに寄ると家人からそんな子はいないと言われ仰天するが、門の外でふじ子に会い、両親が病気で死におじいさんが植木の職人をしてるけやき大臣の家に来た事情がわかり、仲よしになる。

ところでこの作品には、少々誤解を招きやすい厄介な問題がいくつかあるのでそれについてふれておきたい。

表題の変更の問題 一つは雑誌連載中に作品の表題が変更になったことである。すなわち

57・1 } 57・11 「まあちゃんのおうち」  
57・12 } 58・6 「まあちゃん」

となつてはいるのだが、この改題の理由は不可解である。

この作品は内容的に見れば二つに分けることが可能で、15章（連載年月で言えば58年3月）まではヒロインのまあちゃんと動物たちの物語であり、16章（58年4月）からは転校生の友人ができるという別の話になつてはいるからである。従つてもし改題するといふの

であれば16章（58年4月）以後といふのであればそれなりの理由があるが、現行のままでは不可解といふほかはない。従つて「まあちゃん」は独立した作品ではなく、「まあちゃんのおうち」に含まれるものであることをはっきりさせておきたい。

といふのは従来著作年譜などでは初出誌の調査をしていないために、「まあちゃん」は「まあちゃんのおうち」の「続稿」などとする記述もあるが、前述の通りこれは事実誤認であり、あやまりであることははっきりさせておきたい。

作品の当初の構想 次に作者に次のような発言があつて興味深いので引用しておきたい。作者の作品解説「このお話について」（「まあちゃんと子ねこ」（後出）の一節である。

「まあちゃんと子ねこ」は、「このかわいそうな「ひとりっ子」を少しでもさびしさからすくつてやりたい願ひのようなものをこめて、経験をもとに書いた作品です。しかし、猫や犬を育てたり、鶏を飼つたりすることだけで、ひとりっ子のマイナスがすぐわれるとは思っていません。けれどもここではごく単純な意味で、とにかく子猫をひとりの友だちとして「まあちゃん」にあたえたのです。

この作品はだいぶ前、講談社の子ども雑誌に連載され、子猫のしるが行くえ不明になつて、ついにもどつてこないまま終わりにいたしました。ところが編集者の意見で、読者対象が幼児なのだから、やはりしるは見つかつて、安心する結末にしてほしいと申され、それもそうかと思つて書き直しました。けれどわたくしは、やっぱりしるはもどつてこなかつたほうが、自然



であるような気もいたします。それはそれで、「ひとりっ子」の心をきたえることにもなると思うからです。

この作者の自解は作品の当初の構想が編集者の懇望によって変更されたことを明らかにして大変興味深い。それを確かに裏付けるものとしては10章の「白もまあちゃんにだかれて、まあちゃんのおおをみていました。これきりまあちゃんにあえなくなるなど、ゆめにもかんがえていないようなかおをして。」という表現は明らかに当初の行方不明の構想を語っているものといつてよいであろう。この構想の変化について私見を言えば無論当初の構想通り行方不明で行くべきで、白がもどってきたのでは甘すぎる。それでは読者の心をきたえることにはならないからである。

「まあちゃんと子ねこ」との関係 それからもう一つ。先程の引用に「まあちゃんと子ねこ」(64・5・10再版 ポプラ社)という作品が出てくるが、これは前出の「まあちゃんのおうち」(57・1・58・6)のうち、初めと終りをカットして57・4・58・3までの部分(4章・15章)を独立させたものである。従ってこれも前の「まあちゃん」と同じく、「まあちゃんのおうち」に含まれるものなので独立した別の作品とはしない。

戦争の悲劇 「象の花子さん」(58・1・1)「どうぶつえんあんない」1号 上野動物園 月刊 新全集に初収)は第二次大戦が終わってインドから象のインディラさんが贈られて、日本中が喜んだが、その裏には悲しい話があった。戦争中、本土が空襲され始めると動物園の猛獣は危険ということで全て殺害ということになり、注射で殺したのだが象だけは針がささらず、食物に薬をまぜると口に

入れないので残ってしまった。それで餓死させることにしたのだが、象は飼育係を見ると食物をねだってひよろひよろと立ちあがり、芸をしたが遂に餓死、という戦争の悲劇があるので、平和を願わずにはいられない。反戦・平和を訴える宋には単純にオモテの現象にのみ浮かされていることはできず、常にそのウラにあるもの、歴史の真実を掘り起こして指摘することは避けて通れなかったのである。

前半はあきさせない 「すずねちゃん」(58・4・59・6)「たのしい一年生」「たのしい二年生」に全15回連載。のち単行本には収録されず、講談社版「壺井栄児童文学全集」・新全集に初収。ただし「児文全集」の本文は、文泉堂版全集10巻の455頁下6行から457頁上19行までの部分が編集上のミスで脱落している。ちょうど「たのしい一年生」59年2月号の一回分を脱落させたために、物語の展開上雀とどうして仲よしになったのが不明になっている。(はおばあさんのリードですすめに興味をもった一年生のすずねがエサやりから始めて、びっこの雀に気がつき、仲間はずれにされてエサがとれないのをいろいろ工夫してとれるようにして仲よしになる様子を全15回に巧みに描いてあきさせない。しかし、二年生になったの事件 は余りにあざとさが目についてとれない。

前半は見事 「ふたこのころちゃん」(58・4・59・7)「小学二年生」「小学三年生」に全16回連載し、「ふたこのころちゃん」60・9・1 実業之日本社 に初収。児文全集4・新全集に収録。ただし、初出誌のうち、次の五冊 58・5・6月号、58・9・11月号は発行所の小学館はじめその他でも披見されず、初出未見)はみこちゃんの家生まれふたこの男の子(太郎と次郎)のかわいさ、その天衣無縫ぶりを前半は見事に描いて間然する所がないが、後半

のバラ事件になるとまた戦争の悲劇がからんできて理に落ちて興味半減に墮してしまふ所が惜しまれる。

「帳面を消そう」（小川太郎・壺井栄編「子どものための一日一言 一日一つのこころの規律」58・6・5 麦書房 書きおろしで初収。児文全集4・新全集に収録）は日課のきまりきつた事はさつさと片づけてしまおうということ、例によっておばあさんの使い方が巧みなのに驚かされる。

事件が多すぎる 「風の子」（58・7・7）59・7「たのしい三年生」「たのしい四年生」に全13回連載。のち単行本には収録されず、児文全集4に初収。全・新全集に収録）は「風速百メートル」のあだ名をもつ運動会の人気者今日子が出会うさまさまの試練 母の死・新しい母の登場・運動会の練習での初めての二等・母の病気が一人静岡のおばあ宅へ・四人の従弟たちとの出会い・従弟に怪我をさせたの動揺・父母の突然の迎えと母の妊娠 というように、次々に事件の連続で読ませるのだが、「風速百メートル」の速さがうまく生かされていないと、次々と起こる事件が事件のための事件の感があって、出来ばえはよろしくない。

視点転換の重要性 「いぬならぼす」（59・4・6）60・6「たのしい一年生」「たのしい二年生」に全15回連載。のち、単行本には収録されず、児文全集3に初収。新全集に収録）はあけみの家にころがりこんできた犬を飼ううち、やがて成長して子犬を生み、その貰い手とのやりとりを通して大きな問題 私達人間は犬をかわいいから飼うのだが、しかしそれは見方を変えれば人間の勝手な、わがままな、気まぐれでもある都合なわけで、犬にとつては迷惑千万、親子兄弟離散の不幸の始まりということになるのであって、こういう

ふだん我々が何の問題も感じずに通り過ぎている問題について、時に立場を変えて考えてみる視点転換の重要性を提示した作品になっていると考えられる点で評価されるべき作品になっているであろう。

児童文学の新分野開拓の可能性 「ほらほらぼつや」（59・4・60・2）「小学一年生」全12回連載。のち、児文全集4に初収・新全集に収録）は「読んでかきせる童話」のセクションで、新聞記事から毎回材料を拾って書いたもの。一階から落ちた赤ん坊が通りかかった牛乳屋さんに受けとめられて助かった話や、新しい三輪車を買ってもらった六歳の子がうれしさの余り十キロもはなれた町まで走って行った話など、十二の話が幼児によくわかるやさしい言葉で、適切に語られている。特に時事的な話題 ロケットに乗せられて宇宙旅行をしてきた猿や、沖縄の小学校にアメリカ軍のジェット機が墜落して百人を超える死者が出た話、伊勢湾台風の被害の大きさ、長崎の島では暮せないとブラジルに移住する人達、北アルプスで遭難して死んだ六人の大学生の話など、日々起こっている生々しい事件を幼時にわかりやすく話す技術は凡手ではなく、健康が許せば児童文学の新しい分野をきりひらいてみせることになった筈で、その死は惜しまれるものであった。

貧者列伝の笑い 「どんざの子」（65・3・10）「びわの実学校」9号 のち、単行本には収められず、「壺井栄名作集7」に初収。新全集に収録）は栄の生まれ育った小豆島の坂手村の貧者をそれぞれ東西の横綱に配して列伝体に記し、彼らのまきおこす笑いを大らかに記して笑わせるのだが、それにしても東西の両家ともそろって坂手の出身ではないよそのものであるのはどつしてだろうと疑念をばさんで読者に一考をうながす。最後に最近帰郷の折、港でかつての

西の横綱の孫という立派な身なりの青年から昔祖父父母が世話になつたと丁寧な挨拶を受けて恐縮したことを記すが、その感激ももって瞑すべしであろう。

## 七 一九五二～二年のエッセイ

「屋根裏の記録」(50年)で文壇復帰を果たした後は着実に足どりを固め年を追って新聞や雑誌に登場する機会も増え、小説やエッセイばかりでなく、座談会・コラム・ルポルタージュ・識者としての発言・選評などメディアからのさまざまな要求が堆積して雪だるま式に流行作家に押し上げられて行くことになり、折柄映画が全盛期への道を歩き始め、栄の小説の殆どが映画化されるという全く予期しない事態も出来して、珍妙な人間喜劇も起こるのだが、それについては機会を改めてその節に述べることにしたい。ここでは一九五一年(昭26)以後のエッセイを中心とする座談会などの雑文から主要なもの、あるいは落穂拾い(すでに宮本百合子・林芙美子にふれたものと戦争反対、再軍備反対の主張については主要なものはピックアップしたので、その残りということになる)になるかもしれないものを拾っておきたい。

「習慣」の指摘の鋭さ 「戦争はいやだ」という要求(51・2・25 「婦人民主新聞」 いずれにも未収)はこの時「朝日新聞」(51・2・16)に平林たい子が書いた意見にかみついたもので、女性だけが戦争の痛苦をよけい経験しているわけではないのだから女性が「特別な平和要素である」という買被り」はやめよ。戦争中女性性は男

性以上に「扇動にのりやすい弱点」を示していた。女が男よりも平和的に見えたのは「身辺の問題についてだけ」とたい子が言うのに対して ならば、なおの事、その克服をしなければならぬ筈だ。一体、彼女は戦争協力なのか、反対なのか、どっちなのだ、とつめよるのだが、これは栄の方がカッカして頭に血がのぼっているというほかないであろう。

「私の旦那」(51・8・17 「新大阪」 いずれにも未収) はかんしゃく持ちで神経質、「二つの時計を三日と無事に持てない」と言い、「渋谷道玄坂(B 随筆)」(51・11 「婦人公論」 いずれにも未収) では戦争をはさんで二十六、七年の今昔を対比し、「豆自叙伝」(51・7・29 「家庭朝日」 いずれにも未収) では宮本百合子・佐多稲子の知遇を得て「小説を書くいとくちをひき出された」とし、「習慣」(51・10・15 「朝日新聞夕刊」 いずれにも未収) では法事に赴いた席で夫が灰皿をけとばし、灰をまきちらしてしまい、妻は注視の中あわてて跡始末 子供には自分の事は自分でせよと教える親達なぜそうしないのか 手を出さない男の習慣、自分の事のように始末する妻の習慣、それを自然と見る周囲の習慣にふと疑問を覚えたとするが、この指摘は鋭い。「うちのこちそう うどんのすきやき」(51・10・26 「朝日新聞夕刊」 いずれにも未収) はお金の乏しい時に残りものを利用しての、体のあたたまる料理を紹介する。

「小豆島の正月」 人の世の真実 次に一九五二年(昭27)に移って、「おさつ・そうめん・こもくずし」(52・1 「婦人公論」 作・全未収) は小豆島では幼時さつまいもだけではただのような気がしてぜいたくに食べていた記憶を語り、ついで気軽な食べ物としてそう

めん、こちそうとしては魚をのせた五目ずしとして得意料理を語り、「小豆島の正月」(52・1「風花」 いずれにも未収)では今では殆どすたれてしまった幼時の正月行事を追想して語り、中でも門付け万歳の千艘万艘の女は一つでも多く餅を貰おうとして露骨にお世辞たらたらを言うので嫌われていたが、もう一組恵比須人形と打出の小槌を持った夫婦者の万歳はお世辞も言わず、バッタのような芸よりしないが愛されていた。ただし実入りはいつも千艘万艘の女の方がうんざりと背負って腰を曲げて帰って行ったところというところに人の世の真実が見えて印象的である。「初任給二円也」(52・2「婦人公論」新全集初収)では数え十五歳で郵便局員となり、病身故勤めたり、やめたりしながら前後十年の間に二十円まで昇給し県下の一ヶ月間事故無し競争で一等になり、三十円に昇給し、これは女子事務員の最高給であり、小学校の教師並みの給料になった事で母が大喜びした次第を記す。

当時の生活の貧困の実態 次いで「中央公論」(52・2 いずれにも未収)の「特集憲法に云う「健康で文化的な最低限度の生活」と我々の生活」を検討するために実際の生活はどうなっているのかを、農家・サラリーマン・中小企業者・労働者・主婦・各パート別に五・六名ずつ出席してもらって座談会を開き、実状を検証したもので、栄はまず「主婦の座談会」に出席したのち、まための各パートの「司会者の座談会」(五名、名前をあげると、大河内一男「東大教授・労働者グループの司会者」・近藤康男「東大教授・同上農民グループの司会者、以下同じ」・田中慎次郎「朝日新聞・サラリーマン」・壺井米「作家・主婦」・脇村義太郎「東大教授・中小企業者」)の二つに出席して主婦たちは「不平満々」「文化生活なんて

空手形」「豚や犬と同じみたい」「一日十何時間働かないとやって行けない」「税金が高すぎる」「米の自由販売でかえって米が食べられなくなるのではないか」「再軍備は反対、それよりも学校・託児所・医療の充実に税金を使え」というのがその叫びと報告しているが、以後ジャーナリズムにおけるこうした社会的文化的経済的方面でのコメンテーターとしての発言要請は年を追って増えてゆく。

岩波書店発行の総合雑誌「世界」(52・3)の「住宅問題 東京の屋根の下」のセクションに求められて書いたルポルタージュ「巷の家々を訪ねて」(新全集に初収)は東京都荒川区三河島の戦災を免れた都営住宅の惨状に唖然とし、更に通称千軒長屋の有様に呆然とし、荒川放水路近辺の非衛生と悪臭に東京の住宅政策の貧しさを見て言葉を失うのである。

「仲なおりについて」(52・6「新女苑」 いずれにも未収)はけんかは悪いことではない、だから少なくとも餅よりうまいきょうだいげんかのところまでは、女同士のけんかも押しすずめてゆくべしと礼讃し、「めでたしめでたし」(52・10「新世紀」創刊号 いずれにも未収)は「母のない子と子のない母と」(51・11・10 光文社)との結末を「ハッピー・エンド」とする批判に反論したもので、「大学出のインテリが日傭取りになる」というような生活がどうしてハッピー・エンドなのかと問い返している。しかしこの反論は一郎の父とおとらおばさんとの再婚という問題には答えていないわけで、その点では問題のすりかえという批判は依然として残っているであろう。

七五三の行事についての意見を問われて、「気軽な気分で」(52・11・12「東京タイムズ」 いずれにも未収)では「七五三の行事

そのものは残して「キモノ」ではなく、「通学服」や「三輪車」などかねてから欲しがっていたものを買って与えるのもよいのではないかと答え、宮本百合子の「鏡の中の月」(37・10)「若草」の再録の「解説」(52・12)「新女苑」いずれにも未収)の中で「時局への激しい憤りと、若い女性への愛情がほとばしって」「いかに生きぬくべきかを考えさせる」とツボを正確に指摘している。音楽は嫌いではないので、子供らの要望でプレーヤーを買った私の好きなレコード(52・12)「婦人公論」いずれにも未収)としてまずチャイコフスキーのオネーギン中レンスキーのアリア、シヨパンのピアノコンツェルト、二十四の前奏曲を選んだことを記している。

## 八 一九五三年のエッセイ

基地撤収の跡地にアパートを 一九五三(昭28)の年が明けて「産業経済新聞」が「初夢女流内閣大いに語る」(53・1・8)いずれにも未収)と題して栄には建設大臣、佐多稲子には労働大臣、石垣綾子には外務大臣というふう振って抱負を語らせたのに対して栄は「庶民の家を」と題して「基地を引上げてもらってその跡地に庶民のアパートを建設」し、それから「小学校の校舎の完備」を訴え、「小学校を出る人たちへ」(53・3・22)「小学生朝日新聞」いずれにも未収)では、大人への一歩なのだから「まず健康」、次に「正しいことやよこしまを見ぬく目をそらさない」こと、もししあわせなら、その幸福について考えてほしい、もし「不幸」になっ

ているのならその不幸のもとを考えて元氣を出してほしいと激励する。

「むぎめし学園」を訪ねて(53・5)「主婦之友」新全集に初収)は関東大震災で孤児となった子供が篤志家の鶴飼家に入籍して大切に育てられ、早大英文科を出て敗戦の秋に横浜から二人の浮浪児を連れて藤沢の郊外に住み、現在は二十五名、半数以上が問題児の委託という唐池学園(通称「むぎめし学園」)園長を訪ねてルボしたものが、残念ながら外面的で上っ面だけの、通り一遍のもので、栄のものとしては珍しく不出来である。「あやめに水仙かきつばた」(53・6)「風花」いずれにも未収)は花好きの栄が、小豆島の花の風習のあれこれについて語り、「母と呼ぶ子が五人(仮題)(53・10)「主婦の友」いずれにも未収)では戸籍上はともかく、栄を母と呼んでくれる子供が五人あって彼らが「私の母情に火をともしてくれるありがたさ」を記し、「肩させ、すそさせ」(53・10・4)「家庭朝日」いずれにも未収)は秋に鳴くこおろぎは冬にそなえて衣の肩やすそをつくるえと鳴くのだと昔の人は言って、女達に針仕事や手先仕事を当然のこととしてさせられるレベルにとどまらされてきた。しかし、それではいつになっても余りにドメスティック(家庭内の瑣事)な領域・レベルにとどまり女性の地位の向上などは望めぬのではないかと問題を提起し、「日本コトバの十字路」(53・12)「改造」いずれにも未収)では日本語とその表現の問題について六人が共同研究し、その概括を大久保がまとめたもの。六人は西尾実(国語研究所長)・木下順一(劇作家)・丸山鉄雄(NHK)・田口渚三郎(音響学者、国語審議会議員)・壺井栄(作家)・大久保忠利(言語学者)。

弟に悩まされる「沈黙は金ではない」(54・1 婦人公論 単  
 のみ収録)は栄の書くものは「おしゃべりの文学だ」とも評され  
 るのだが、スピーチは極端に苦手で、いつも失敗ばかりしている  
 例をあげて語り、「親友交歓」(54・1「群像」単のみ収録)の  
 グラビアでは佐多稲子との写真の中で知り合ってから二十六年、  
 「手をひっぱられて歩いてきた」と記し、「お年玉(D 随筆)」(54・  
 1「新刊月報」いずれにも未収)では、孫に口説き落とされてお  
 年玉に電気機関車を買ってやったがそこへ親戚から電話があり、そ  
 の二人の息子にお年玉の約束をしていたのだが、それを生活費にま  
 わしたので金で欲しいのだという。二人の子供は間もなく、もち  
 ろいに来るといので、孫には電気自動車をしまわせる次第を描いて  
 明暗の対比が鮮やかな一篇。件の人物は作者の実の弟で実在する。  
 この前後生活に困窮してありとあらゆる詐欺的手段の限りを尽くし  
 て栄から搾取して大いに悩ませた。

「嫁正月」(54・1・9「産業経済新聞」いずれにも未収)で  
 は姑のある妻たちが一日集まって遊び、中には宝引(糸の束の先に  
 金品を結んで当落を楽しむ)などして巡査に踏み込まれ、離婚騒動  
 の話も起きた昔の話を記す。

詳細な自伝「私が世に出るまで 作家壺井栄は語る」(54・  
 1「新文苑」新全集に初収)は栄の自叙伝中最も詳細で具体的、  
 且つほぼ忠実に語っていて信頼することができる。談話筆記の体裁  
 なのだが、文中どこにも談や文實在記者等のことわりがな

いとこから考えて、栄の校閲を経た自伝とみてよいであろう。

「成長しない子供たち 精神薄弱児の実態」(54・2「婦人公  
 論」単・新全集に収録)はいわゆる精神薄弱児の実態を都立青島中、  
 代々木西原小、神奈川県立ひばりが丘学園を訪ねてルボしたもので、  
 政府の無為無策に対する栄の憤りがストレートに伝わってくるもの  
 となっている。当時、精神薄弱児の義務教育年齢該当者数は41万人、そ  
 のうち僅か1%の4千人だけが適正な教育を受けるだけであり、残  
 りの40万6千人はお客さまとして放置されたままなのだ。当然、彼  
 等は犯罪者予備軍となり、その率は40%を超える。仮に適正な教育  
 施設に収容されたものでも18歳になれば社会に出されるので、親た  
 ちは「大きくならないで」と祈るのが常だという。それならば約40  
 万人を収容する教育施設の費用はどの位かと言えば保安隊(現在の  
 自衛隊)一五〇人の費用に相当するものという。栄ならずとも関係  
 者の嘆く所以であろう。

次に座談会「嫁と姑のトラブルは永遠に解決できない問題か」  
 (54・2「婦人倶楽部」いずれにも未収。出席者 井村恒郎「精  
 神科医」・土井正徳「医博」・大浜英子「家裁調停員」・栄・丸岡  
 秀子「評論家」)に出席して、クサイモノにフタではなく、無邪  
 気にぶつかって互いに言いあうのがよい、嫁・姑共に悪口でも  
 よいから、そのはけ口をつくる必要がある、と説き、これ以上の言  
 及はしないが、この前後この種の話には欠かせないコメンテーター  
 としてひっぱり出されている。

「私の好きな花」(54・4「文芸」いずれにも未収)では花好  
 きの所以を「花は私の空想を刺激してやまない」からと言い、「子  
 どもの日」(54・5・5「都新聞」全のみ未収)は去年あたりか

ら数え11歳になる男の子が子供の日が近づくとやたらにいろいろなやがぶとをねだるが、高いし、「戦争道具」だからといって買ってやらぬ。しかし、ひなの節句にはひな人形を出して桃の花を私は飾っているが、あれも考えてみれば「封建の遺物」ではないか。デパートでは大々的によろいやかぶとを売り出しているが、節句を男の子から奪ってこどもの日を決めたくらいでは日本の子供は幸せになれないので、「空手形に等しい夢」「物語の児童憲章を少しでも生かすこと」を考えたいと問題を掘り起し提起している。

こういう身近な日常の中に問題を発見し、自他を含めて何気なく見過してきたところに問題のありかを鋭く指摘するというのが栄の特徴だが、これもそうした彼女の特徴が出たものと言えると思う。

「私の読書遍歴」(54・5・17「日本読書新聞」全のみ未収)では若い時に文学修業の時代はなく、読書も村の貸本屋から時々くでもない講談本を借りて読んだ程度なので読書の習慣が無く、根気もない、とここでも記すが、栄にも立派に文学少女時代があり、同人誌に加わって活動していた時代があることについては既述した通りである。続けて、黒島伝治や壺井繁治は小豆島から東京に出て文学修業したが、栄はその間郵便局や村役場に勤めてむなしく過した。文学修業を始めたのは大正十四年(一九二五)に上京して壺井繁治と結婚し、林芙美子や平林たい子に接し、更にプロレタリア文学運動の中で佐多稲子や宮本百合子に出会って読書と創作を勧められてからである。しかし若い時に読書の習慣を逸したために組織的系統的読書は遂にダメで身につかぬと告白。木下恵介監督が撮影中の「二十四の瞳」の口ケをみて(54・5・27「四国新聞」いづれにも未収)、口ケを見るのは初めてなのでその大変さ、苦勞の積み

重ねに驚き、その日見たシーンはラストの方であったが主演の高峰秀子の演技は「圧巻」で「真にせまっていた」ために「この映画に非常な期待を更に改め」ることになり、「うれしくて眠れなかった」と記すが、公開後の大ヒットを思えば栄の直感の鋭さには舌をまかざるをえないであろう。

「王女と皇太子」(54・6「群像」単・作・全未収)では当時の世界的にヒットしたA・ヘップバーン主演の映画「ローマの休日」を見てそれとの対比で日本の皇太子の窮屈さを考え、グラビアカメラの旅 オリーブと巡礼の島 小豆島 のセクションでは「わがふるさと」(54・6「主婦の友」いづれにも未収)は戦争で荒れたが「終戦後十年、ようやく旧に復帰した島」だが、島の一角には戦争の傷あとを残す「捨子の収容所があり、皮膚や目の色の異なった孤児もいると聞く。小豆島よ、オリーブとともに栄えよと私は祈る」とエールを送る。

虚名の被害 「えいがの夢」(54・6・13「東京新聞」作・新全集に収録)は当時最も巨大な娯楽産業の座を占めつつあった映画の世界に栄の作品が次々に買われて映画化され、いづれも好評を博するということがあって虚名がまかり通り、「万能の神かなんぞのように考える人」が出て「部屋を探してくれ」「職を見つけてくれ」「結婚相手を探してくれ」「金をかしてくれ」等々、いろいろ悩ます例を記す。ある時、ああ、お金があったらなとこぼすと、居あわせた知人が「映画にまでなっていて」と呆れ顔でいうのにこちらが呆れて、一体映画の原作料はいくらと思うのかと聞くと、一ケタ違うのでふき出す(ついでに「二十四の瞳」について記しておく)と、夫の繁治は栄の死後、原作料は20万、手取は17万「驚言雜記

6「68・10・8」月報6「筑摩書房」であったことをあかしている。親類がタケノコ生活をしているので出入りしている不動産屋の話というのを聞かせてくれたが彼の言によれば栄は映画で次々に当てるからいずれ鎌倉あたりに邸宅を構える筈だから、そのあとの家をあなたはおもらいなさい、というがとてもそんなふうには見えないという、そんな筈はない、手元にもってなくても「三百万や五百万の金は電話一本で足りるだろう」と言っただが、一体どこに電話をかけるのだろうかと嘆じている。こうした周囲からの野次馬根性によるお節介や、はた迷惑な雑音による被害を後に栄は「腫れ」と呼んでいるが、その数はこれを書いた昭和31（一九五六）年12月12日の時点で無慮数千に及んでいるという。

これに類するものに、読者の投稿する短文（四〇〇字五枚）を毎月読んで入選作を選び、短文選評（54・6）55・8「婦人画報」いずれにも未収）を書くという仕事を雑誌「婦人画報」から依頼されて54年6月から55年8月まで15回選者を引受けているが、これなども流行作家にまわりつく無駄仕事の典型と言つてよいであろう。「ぶとったおはさん」（54・7「新刊月報」グラビア いずれにも未収）では遊びにきた大田洋子がいなりずしを食べながら、あなたは食い過ぎるから太ると何度も言うが、家の娘たちに言わせると栄の半分のやせつぽの彼女の方が大食いで二倍は食べたと言つ「アメンボのようにやせた私からは私の小説は生れつこないのだ」と居直つて反撃しているところがおもしろい。

「母親の憂鬱」（54・7「婦人公論」 いずれにも未収）は当時変質者の犠牲になつた小学生の事件があり、その鏡子ちゃん事件の反省のセクシオンに意見を求められて、いつでも事件の跡をおつ

かけての青葉はりの政治はやめて「子供の問題にこそ再準備以上の積極性」をもって取組んでこそ救われようと正論を射た指摘をする。54年10月12日発表の中ソ共同声明に対しての意見を求められて栄は「今こそ勇断をもって中日両国の親善を深めよ」（54・10・23「婦人タイムズ」 いずれにも未収）として「素直にあの共同声明を受け入れたい。アメリカに対する遠慮や卑屈さでなく、今こそ勇断をもって中日両国の親善を深める態度をとって頂きたいというのが私の気持ち」と明言する。

余りにも多作の日常「私の書齋」（54・11・1「中国新聞」 いずれにも未収）では東京の西郊鷺宮に移つたのは昭和16年のこと、当時は人家もまばらで武蔵野の情趣ゆたかなところだった。最近とみに訪客が多く、仕事が忙しいので信州に行つて仕事をしている。昨日（十月十七日）も信州から四カ月ぶりに帰つてきたところ、その間書齋を夫に貸していたが、もとに戻してもらった。これからの仕事の予定は新聞小説を一五〇回ばかり書くこと（鷺注「毎日新聞夕刊」に連載した「雑居家族」をさす）、半自伝的なものを書くこと（同様に茂緒をヒロインとする「花」「歌」「風」「空」の連作小説をさすものと思われる）、庶民の姿を描くこと（特に何をさすかは不明）それにしても今の私は余りにも多忙すぎて編物や裁縫のできないのが残念として多忙な日常をかこっている。

「文学のほんとうの味わい方」は「内容見本」（54・11「文学の創造と鑑賞」全五巻 岩波書店刊 いずれにも未収）の推薦文として書かれたもので、文学は今日私たちの精神生活になくてはならぬものとなっている。「だから文学作品のほんとうの鑑賞の仕方は、ただ小説の筋や事件を辿るところにあるのではなく、「作品の感動



を、作者があらわそうとした量と、その深さの底にまでじっくりはいりこんで味わうことが何よりも必要で、そこに作品を仲立ちとした作者と読者との深いむすびつきができる。」のであり、それは読者に十分満足を与えるのみならず、やがて「鑑賞者の立場から創造者の立場へまで高めて行く」であろうと、この種の推薦文にありがちな通り一遍のものではなく、珍しく本質にまで踏みこんで論理的原理的に述べている点で本気度が伝わってくるものとなっていよう。同様に「グリム童話全集全五巻 一九五四年 河出書房刊」の「内容見本」の推薦文として書かれたのが「子どもに太陽を」（いずれにも未収）で、そこで栄は「よき童話はよき人間をつくる。ところがこの頃は俗悪な読物のはらんして、子供の健康な心を蝕もうとしているのだ。このときにこそ、グリム童話は太陽の役目を果たすものだ」とする。

## 十 一九五四年のエッセイ

新しい見合結婚のすすめ 次の「自覚した若い女性の結婚観が嬉しい」（54・12「スタイル」 いずれにも未収）は雑誌の特集記事「見合い結婚への新しい光」として最近ぶえてきた見合い結婚必ずしも古くない、という結論を得たのだが、その七例のレポートを栄が読んだの感想を記したものだ。基本的には恋愛結婚の方が望ましいが誰にでもそのチャンスがあるわけではないので、「きつかけはお見合いであってもいい」わけで、「要は当人同士のしつかりした納得が大切」。七例を読むと男性の立場から書かれているが、その裏に「自覚した若い女性のしつかりした結婚観がうかがえて、た

のもしい感じ」がしたと言いつつ新時代の結婚のあり方としては、「お見合いで実際のきつかけをつくってもらった二人が、おつき合いをして恋愛関係に入った上で結婚するのが新しい見合い結婚のあり方じゃないか」と提言している。

「妻の座を追われた若い人へ」（54・12「主婦の友」 いずれにも未収）は複雑な事情に悩める女性への手紙のセクションで、三人の子と夫を捨てて家出し、離婚した前妻が夫の再婚を知るや乗りこんできて後妻を追い出し、子供も実母につき、夫もあきらめてくれというばかりだが、あきらめきれぬものがあって……というのに対しての栄のアド바이スは「あなたひとりに戻った方がよい。」それは決して泣き寝入り・貧乏くじ・悪い夢ではなく、「あなたの精一杯で押し進められてなお招いた失敗故胸をはってほしい。人間なんてみな失敗があり、それを重ねながら、かしくなっていくところに、人間の人間らしさもあるものなのです。」「不幸に負わずに、失敗にこりずに、あなた自身に花を咲かせ、実らせて下さい。」というものである。

初対面からのつきあい 「稲子さんの昔」（54・12・10「多喜二と百合子」7号 いずれにも未収）は稲子との交友の始まりからを回想したもので、初対面は三・一五事件のあった昭和三年、「キャラメル工場から」を発表したばかりの時で窪川鶴次郎の使いで繁治（栄）宅に人を訪ねてきたがあいにく留守で言伝の手紙を置いていったが、その時栄は稲子の印象が「あまりにさわやか」で、これがあの「キャラメル工場から」の作者かという目でながめていた。二度目は山本直治の葬儀の日で、警官に追われて近づけず、ぐるぐる歩いているうちに稲子と出会い、連行される鶴次郎を見て彼女は「今

に、きつとずらかつてくるわよ。うまいのよあの人」と言う通り、いつの間にか隣に来て歩いていった。十条の家を訪ねた時は大きなおなかをしていて駅まで送ってくれたが、初対面の時に比べてずい分やつれていたが、その後間もなく東中野の駅の傍で会った稲子は「はつらつとしたおかあさんぶり」でその後は「皺のよるのも気づかないような近き」でくらししている。

佐多稲子は栄にとって生涯の盟友ともいうべき存在なので、ついでにここで最新の文泉堂版全集に収録の二篇も、時期的には若干後ものだが紹介しておきたい。「ほんのささいながすかすの思ひ出」(59・3・15「月報」8「佐多稲子作品集」3 筑摩書房 いずれにも未収)は三十年に及ぶ交友のうち、着物に絡む思ひ出を書きたいとして、佐多はまず「見立て上手」で、すすめられた者は「みな満足」し、栄の場合すすめられた帯は「二十年近く、いまだに飽きずに愛用」しており、次に好みにも共通のものが生まれるように「琉球織物」でお揃いの着物を作る。そしてまさきに「きものを買ったのしみをわがものにしたのが佐多」であったという。「裏道づたい」(60・8・5「月報」32「新選現代日本文学全集」11 佐多稲子集「筑摩書房 いずれにも未収)は年齢は栄の方がぐっと「年上」だが、仕事の上では「大先輩」であり、「ものを書くきつかけ」を与えてくれた「たよりになるそしてやさしく、そしてきびしい人」であり、戸塚から戦時中鷲宮の栄宅の近所に越してから「毎日顔を合せない日はない生活」となり、やがて小平から、更に都心へと移っても訪ねあう交友は変わらず、最近では栄夫婦の結婚35年を「金メッキ婚」と名づけて小さな金メッキのカップを贈ってくれたという。

「季節のたより 七月」(54・12・15「窓」1号 サボイア内

「窓」編集室刊 いずれにも未収)は全文を次に引くと、「弟さんにお目にかかりました。いろいろと北海道の香りたかいお土産をおこつげ下さいまして、ありがとうございます。サボイアも御繁昌のお様子で、何よりでございます。私もまた山にこもろつかと思っております(五日附)」というように以前札幌で編集者をしていて栄の「海風」(46・9・7 新日本文化協会)を出版したこともある和田義雄がその後出版業界を離れて喫茶サボイアを経営し、そのかたわら趣味的に作った「ニチュア雑誌」(タテ12.7cm x 横19cm 全24頁)が「窓」であり、「季節のたより」はこの一年間に私に寄せられた手紙やハガキの中から、思ひ出なつかしいものを月別に選んで並べ(あとがき)たもの。小誌に反して、流石にベテラン編集者、内容はヴァライティに富んでいて楽しい。「みかんの歌」(54・12・19「朝日新聞」 いずれにも未収)は幼時からのみかん

の思ひ出を綴ったもので、こうじみかんは初めは小さいので一升マズ売りで、暮れになると紀州からみかん船が来て浜で売った。それもだんだん大きくなり、甘くなった。隣村の男と結婚すると夫の家から正月にはみかんを送ってきたが、やがて絶えた。戦時下の食料増産でみかん山にはカボチャのつるがはっていたからだ。その山もやっこの頃昔の美しさにかえってきた。このみかん山を再び疲れさせるようなことはしたくない、と結んで反戦平和への意志を明らかにする。

その点では「二十四の瞳」のことなど(54・9・22 合併号「週刊家庭朝日」 いずれにも未収)も同様で、この一文は映画の風景の美しさやヒロイン高峰秀子の演技についてはなくて、この作品の内容について述べている。これは戦前の昔の物語で、今とは

何の関係もない話であろうか？とんでもない、最近の教育二法案だの、治安維持法に代わる秘密保護法案だのと、言論圧迫の新しい法律が次々と生まれたりしていることは、今を昔に引き戻していると思えない。現にこの作品を書いている時、吉田首相は保安隊（鷹注 のちの自衛隊）隊員を前にして「軍国の基礎たれ」と訓示して物議をかました。そういう逆コースの力にどこまで抵抗できるかということも考えさせられるとして、逆コースの動きへの注視を怠らない。

## 十一 一九五四年の小説(一)

次に一九五四(昭二九)発表の小説を見ておきたい。

「枯野」(54・1「群像」 全のみ未収)は明治から昭和の戦後までを生きた姉弟の幸薄い生涯を辿ったもので、古風な筋立ての中に風が吹き抜けるような孤独を見つめた作品である。

若き日の黒島伝治のこと 「今日の人」(54・1「新日本文学」 全のみ未収)は「私」の知っている黒島伝治、「人なみに類に血のさすようなことでもあった」あなたの思い出をかいておきたいとして、実際のはじまりは伝治から栄宛のラフ・レター事件であり、当時郵便局に勤めていた十六歳の栄に十八歳の伝治から手紙が来て、それが本局内に知れて大さわぎになったが、手紙の内容そのものは伝治が数日前に局に来た時、栄の机上に置いてあった原稿紙を綴じた回覧雑誌についてあれは何かとたずねたものであった。それは局長の親戚の大学生が置いていったもので、それがきっかけで「公明

正大」な文通が始まり、「青テーブル」という四頁の小雑誌をもらい、それに黒島通夫というペン・ネームで短歌が載っていて「文学」というものを志してい」るのを知って驚く。

その交際を栄は「指一本触れ合わぬ」故に母には話してあったが、伝治の方は「両親に知れるまで」隠していた。

小咲との恋 栄の同級生で「文学少女」だった咲子(本名は岡部小咲)を伝治に紹介すると忽ち二人は恋に落ち、栄は双方の私設郵便局となってデートの仲介者となった。従って三角関係というものはなかったが、このデートは「不思議」なもので、第三者である栄を入れたあいびぎで、いくらことわっても咲子は栄の手をはなさず、三人一緒に村の中を歩いていた。間もなく咲子は死に、栄は役場に変わり、伝治はシベリアに行き、やがて東京で再会した時は互いに結婚しており、伝治は作家として「立派な作品」を発表していた。今にして思えば、栄が繁治や伝治と同じ道を二十年も遅れて歩き出したというのも二人の先達の「呼吸していたその息吹」が影響していなかったとはいえないように思う。そして再び栄が伝治に接近して行った時、彼は故郷に病を養う身であり、戦争下に死んだ。

あれから十年。あなたの作品は再び今日の活字になり、「渦巻ける鳥の群」(53・2・5 岩波文庫 解説 壺井繁治)、「武装せる市街」(53・7・15 青木文庫 解説 壺井繁治)として刊行され、若い読者を獲得し、今日は作者のあなたを偲ぶ集会がもたれ、私それを祝って赤い花を捧げるとする。

戦前のプロレタリア文学弾圧の中で生き死にした黒島伝治の文学が戦後になって再び評価されて相次いで二冊の作品集が刊行され、作者を偲ぶ集会がもたれたことを記念して「栄だけが知っている若

い日のこと」を書いたもので、貴重なエピソードの宝庫の観があり、伝治の伝記研究中の白眉と言っても過言ではない。

しかし、この作品には記述の伝記の部分で指摘したように、取扱う上で慎重を期さなければならぬところが一点ある。それははっきり言えば栄と伝治との関係はどうなのかという点がはっきりしないことである。

解けぬ謎 この点に関して栄は伝治との交際は「公明正大」で「指一本触れ合わぬ」色恋又キの精神的あるいは文学的交流で恋愛とは無関係。伝治はやがて栄が紹介した坂手小学校の同級生小咲（本名岡部小咲。当時大阪の看護学校で看護婦になる勉強をしながら歌人啄木や中条百合子に打ちこんでいた）と恋に落ち、小咲が肺病で帰島してからは栄がデートの連絡係として仲介役を果たした。従って三角関係というものはない。

但し、このデートは甚だ奇妙なもので伝治と小咲をひきあわせて栄が去ろうとすると、いつも小咲は栄の手を握って離さないため、第三者つきのデートとなったことで、栄はあれから四十年たった今でも、どうして小咲が栄の手を離さなかったのか不思議でならないとしている。

恋愛という微妙な問題がからむだけに栄の記すところだけでは一方的であり、他の二人の発言もぜひ聞きたいところであるが、今となっては解けぬ謎として残されてきた。

小咲書簡の発見 ところが稿者は最近、この三者の関係を明瞭に解き明かす新資料を入手。縁者の許に保管されてきた黒島伝治宛岡部小咲書簡がそれで、これによって三者の関係が明らかになった。

ここでは紙数の都合があるので、詳しくは既述の伝記の部分を参照

していただくこととしてここでは結論のみを記しておきたい。

第一にこの書簡によって栄が言う風変わりな第三者つきのデートが事実として存在していたことが確認されることである。

第二に伝治と栄との間に小咲が出現したことによって、彼女は心ならずも親友の栄から伝治を奪うことになってしまった深い罪の意識におののき、「皆んな私自身の作った罪」だと言い切り、伝治もまたそうなってしまった事態の変化に「自身の重い積任」を自覚するに至っていることであり、従って第三にこれは当時の時点でまぎれもなく三角関係なのであって、決して「色恋又キの精神的交流」というようなキレイゴトではすまされなことを証している。少なくとも栄を間にして伝治と小咲が違い続けていた限り、二人は栄の知らない「悪」と「苦痛」と裏切りの「罪」の中に背徳の喜びも味わっていた筈である。

第四にこれは十八歳の恋する娘の心情を大胆に告白しているわけで、伝治と栄のこれまでのいきさつからすると、小咲がこれに加わるのはそれを破壊する悪であり、裏切りであるから二人っきりのデートはもうやめると宣言する。しかしこれはタテマエであるからすぐホンネが出て「接吻してください。そして抱いてくださいませ」と大胆に挑発する。たとえそれが「夢」の中でと留保がつけられていたにせよ、大正初年代の十九歳の男にとってはそれがどれ程の衝撃であったかは想像に難くない。無論それを発した女はその表現によって喚起されるイメージをも享楽している筈である。

しかし我に返れば再び罪深さにとらえられ、「私自身の作った罪」ということになるが、しかしそのあとにすぐ続けて「私は貴方の御顔を見る度にいつも堅い決心がゆるんでしまいます」と矛盾葛藤す

る心情を正直に告白する。

さらにこのあと、小咲に合わせて伝治の帰京の日を早め、船中でゆっくり話をしながら帰ろうと提起して、はじめに宣言したデート解消などはどく吹く風と言った矛盾撞着を至る所で露呈するのであって、これは要するに罪の意識を自覚しつつも抑え難い情熱にひきまわされて動揺する十八歳の恋する娘の心を正直に告白したものと云つてよい。

この時から九月後の大正八年（一九一九）五月に小咲は十九歳肺結核で没するが、その間栄は二人の間にそういう默契があったことなどは無論知る由もなかった。<sup>12</sup>

換言すれば栄が立たされた三角関係とは、幼なじみの男と女、二人からの残酷な裏切りであり、親友同士が血で血を洗う地獄が出現したことであって、栄にとつての初めての愛は裏切りという反噬によつてしたたかな傷を負わされて挫折する。せめてもの救いは恐らく、小咲のあつけない死と、伝治の出郷であつたらう。大正六年前半頃に上京した彼は勤めたあと、八年四月に早稲田大学英文科高等科予科へ、入学ののち、同年十二月には徴兵され、シベリア派遣となつて彼女の前から去つたからである。

## 十二 一九五四年の小説(二)

「南天の雪」(54・2・28 「別冊文芸春秋」38号 単・作・全・新全集に収録)は当時流行作家であつた栄の所に押しかけて何がしかの金を要求する一人の老婆を描いたものだが、彼女の息子倉橋は

反戦詩人で昔、夫の勤務先の同僚、父は「学習院の教授」、母は品の良いインテリの女性で、彼も貴族で学習院を出て、早くに戦死し、焼け出されて一家は嫁の郷里に行つたと聞くが、その後嫁は「パン助」となり、黒い子供を生み、その子の守をしるといわれるのがイヤで、十七歳の孫娘(今年中学を出る)とけがれた家を出て、老婆は女中に、孫娘は夜学の高校にでもやってくれ、と坐りこんで二日間二十時間ねばられるが「いくばくの金」を求められて退散してもらうのだが、その間のかつての「品の良いインテリの母」が「鬼婆のようなすこみ」と口元に「意地悪さ」をただよわす変身ぶりを鬼気迫る迫力で描き出して見せるインパクトは強烈である。本来倉橋家でも戦争が生み出す醜悪無惨な現実に対して姑・嫁・娘が一体どうして生きて行くのか、原点に立ち止まって方策を十分相談、決めなければならぬ家族会議が必要であるにもかかわらず、それがなされていなく問題があるわけで、その最大の障害となつているのが黒い異民族という人種への差別問題という戦争がもたらした新たな火種にほかならない。

「お千久さんの夢」(54・3 「文芸」全のみ未収)は雑誌の特集 現代のおとぎばなし のセクシヨンの求めにかかれたもので、安サラーマンのお千久さん夫婦の夢はフカフカの客蒲団をもつことで、そのために嘗々と仕立物や生み立ての卵の販売で積みたてるほかないが、やっとたまってくるときまって長男の戦死、長女の結婚、姉から貯金をまきあげられたうえ破産してもどつてこず、遂に脳溢血で倒れ、フカフカフカに寝ている夢を見るといふもので、人の世の幸福のありかたを象徴的に示したものだといえよう。平野謙「文芸時評(上)」(54・2・27 「朝日新聞」)は作者

の「むかしからの人柄がなおひとつの魅力となっている」と評し、日野啓三「読書ノート」(54・11「新日本文学」)は「お千久さんの夢」という一篇など決してそうそこらにころがっている代物ではない。(中略)戦争の被害とか、平和への願いとが、女性の解放とか、そうしたこと、多くの作家とちがつて、とってつけたようなところのないのがうれしい」と言い、創作集「月夜の傘」については「私はふとチェーホフ初期の短篇を思い出した。と言えどもちろんほめすぎだが、柔かい無理のない筆致、淡々とした話に結構気の利いたオチをつける。達者な技巧、そこはかとなないペーソスをたたえる余韻、どうしてなかなか隅におけないばあさんだ(いや失礼)。」とする。

戦争の傷 「養子の縁」(54・8・28「別冊文芸春秋」41号 全のみ未収)は昭和十八年の秋に信州の上林温泉を訪ねて以来の常宿塵表閣での前のおかみ、今のおかみと二代続いている養子にまつわる話からはじめて、その縁で林芙美子の二代続いている養子の話、栄の正子と文吉(右文のこと)の入籍の話と続くが、最も印象的なのは戦争で両親を奪われた文吉のことであり、もう一人旧友の未亡人中林たか子のことである。文吉はさておき彼女は結婚後半年で夫を戦争にとられて死に、今度はじめて遺族への「恩給」というのを貰ったら「主人の生命はどれだけの値打ちに勘定されたものか、試してみようとなって謀叛気をおこし」大阪、東京とヤケ食いついてまだ少し残っているので信州まで足をのばしたと語るたか子の無念さ、むなしさ、口惜しさが強く心に残る。

### 十三 「風」の完成

連作小説「風」 この年後半に至って栄は流行作家の繁忙に追いまくられていたにもかかわらず、創作意欲は極めて旺盛で、9月から12月までの四ヶ月間に連作の自伝的小説「歌」(54・10「改造」)、「風」(B 小説・茂緒もの)(54・11「文芸」)、「空」(54・12「改造」)、「花」(54・9「群像」以上四作は単・作・全・新全集に収録)を集約的に発表(ちなみにこれら四作の合計頁数は97頁であり、通常の依頼原稿枚数の約二倍になる)し、その年の内に早々と四作まとめて「連作小説 風」(54・12・5 光文社 カッパ・ブックス)として刊行した。ところがその後の経過を見ると、それから三年たかない57年4月20日に「風」として新潮文庫に収められたのだが、それには「花」はカットされて収録されず「歌」「風」(B 小説・茂緒もの)、「空」の三篇が収録された。ということは「風」という総題のしぼりはきついものではないようなので本稿では「風」の総題でくくることはしなかった文泉堂全集の編集方針に賛同してこれに従った。

自伝的小説 もう一つ内容について論じる前にふれておかねばならないのは、これら四篇の作品は自叙伝なのかという問題である。この点については栄に「日暮れの道」<sup>13</sup>と題する文章に次のような言及がある。

この連作小説を私の純然たる自叙伝だと思っている人もあるようだ。そう思われても仕方のない要素が、この四篇にはある。

しかし私としてはこれをもって自叙伝ですとはいききれない。ただ「自伝的小説」という分には、まあまあそんなところでしょうと答えられるかもしれない。というのは、自伝としてあまりにいいつくしていないし、(つまりきれいなことすぎる)といつて出てくる事件はあまりに私の体験に似すぎているにも拘らず、虚構も相当にあるからだ。しかもその結果は、モデル的興味だけで、大変誤解されたりして、書き続ける意欲も半分がとこそぎとられた感がなくもない。

これを書きかけた時の私の気持は、日暮れの道を歩きながら、うしろをふりかえるような思いで、夕靄に包まれた遠くの景色を思い出し思い出し、書きとどめておこうという、有りきたりの考えからだった。ところがあんまりたてつづけに書きすぎてくたびれてしまい、追っかけるようにして単行本になったのを見ると、ますます書き続ける気持が消えてしまった。前に出た単行本のあと書きの中で私は、こうした連作の形であるの部分も書きつづけると書いているが、おそらくもう書かないのではないかと思う。誤解されたり、恥をかくことぐらいはもう馴れているが答をもって自分で自分を追い立てるような仕事ぶりはもうしたくない。日暮れの道が暗くなったら、こころで一歩くしようと思う。

一九五六年七月十四日

つまりここでの問題の第一はこの作品は自伝(自叙伝)なのか、それとも自伝的小説なのかという点であるが、それについて作者はこれを自伝としてみれば「あまりにいいつくしていない(つまりき

れい)ことすぎる)」し、かと言って作中の事件は「あまりに私の体験に似すぎていて」にもかかわらず、「虚構も相当にある」点から言えば、「自伝的小説」と呼ぶ位が妥当なところなのではないかとしている。

たしかに作者の側の立場からすればこうした弁明ないし言分は当然出てくるであろうが、しかし言うまでもない事ながら、作品は一旦作者の手を離ればその弁明や言分とは無縁に存在するわけで、従って読者は作者の言分に従ういわれは全くない。

この連作小説「風」は第七回女流文学者賞を受賞したことが示すように、作品そのものが独立した価値をもつすぐれたもので、作品にフィクションがたとえ含まれていたとしても自伝的な作品として読まれている。なぜならフィクションを全く含まない自伝などと言うものは存在しないからだ。

仮に問題になることがあるとしても、どういふフィクションがどの程度含まれているかということが、全体との係わりで問題になるだけであろう。

壺井栄の研究は非常に遅れているのが現状で作品面、伝記面共に基礎的、実証的な信頼するに足りる調査、研究は漸く緒に付いたばかりで多くは今後の課題である。そういう中で稿者も研究をスタートさせ、書誌的な調査、作品研究、伝記考証を総合的に推進してきた。その過程で未知の発見はもとより、栄が殊更に事実を隠蔽し、あるいは歪曲し、またフィクションを加えるなど、事実と異なった操作を行った場面に遭遇することもしばしばであった。

本稿ではそれらの指摘も明らかにしながら現在の時点での虚実も確認しておきたい。

続篇執筆意欲の消滅 前引の栄の「日暮れの道」のもう一つの問題は、連作小説「風」の「あとがき」には「この連作四篇が、ながいあいだ、いつかは書きたいと思っていたものの一部分であり、したがってあとの部分もこんな形でつづくだろう」ということを付記しておきたい。一九五四年十一月」と記すが、それから二年経った「一九五六年七月十四日」執筆の「日暮れの道」ではもはや続稿を「書き続ける気持が消えてしまった」「もう書かない」と一変してしまつたことである。

その理由について作者は読者の関心が専らモデルへの興味、詮索に偏向してその結果大変な誤解を受けたこと、第二に執筆のモチーフは過去の記憶の定着であつたが、集中的に書き過ぎたためにくたびれてしまい、「追っかけるようにして単行本になつた」ことである達成感が生じて「書き続ける気持が消えてしまった」ことをあげているが、述べられている限りにおいてそれは正しいものであろう。しかし実際の、現実的な理由としては「二十四の瞳」以後売れっ子の流行作家としてさまざまなメディアからの要請に応じていた身にはその余裕がなかつたというのが本音といつてよいのではなからうか。

#### 十四 四作の時間・構成・反体制的トビック

さて、前置きが長くなつたが、肝腎の中味について検討すると、この四作は時間的にはヒロイン茂緒の誕生した明治三十三年から、夫が二度目の刑務所入りをして小説を書き始めた昭和の初め頃まで

の約四十年間前後の期間を、短篇小説として時間を追つて綿密詳細に描くというものではなしに、トビックの問題をとりあげて問題中心的に配列するという構成をとつていふといつてよいであらう。その意味でははっきり言えば長篇小説としての構成、骨格は脆弱で、構造的美観などは当初から眼中にはない。

しかし、その反面層層累々たる長篇などのもち得ない親しみやすさ、部分や断片のもつキラリと光る魅力を随所に發揮して見せるのである。

今、便宜上最初に単行本として刊行された時に「連作小説 風」としてまとめられた作品の配列順にしたがつて「歌」「風」「空」「花」の順に見てゆくことにしたい。

小田切の鋭い指摘 「歌」については小田切秀雄に鋭い指摘がある。

「曆」の場面とはちがつて作者自身の自己形成の歴史の追及ということ正面にすえ、自分が現在の自分であることの根拠をさかのぼってさぐってゆこうとしている。貧しくつらいことの多かつた既成の秩序のなかには、おさまりきれないだけのつよい人間的なエネルギーが、たんに庶民的な向日性やしつかりした気性（たとえば戦争下の作品「大黒柱」の女主人公のような）というだけでない、自覚的な反逆的なものとして成長してゆくのは、大正後期の時代的な状況との関連においてであり、これは具体的には、修造という名で登場する壺井繁治や倉島という名で出てくる黒島伝治らによる刺激として現れている。

（「解説」69・1・10「壺井栄全集」 筑摩書房）



として、さまざまなかた、かたちで時代が若い女性にまで「既成への反逆と自己解放」の道に進むことを可能にしはじめていたのであり、そういう作者自身を描くとともに、日露戦争での戦死者の母の嘆きや天皇への恨み、遺族扶助料の支払いにおける階級序列制の問題など反体制的、反戦的な問題につながるトピックをいくつも含むようになってくるのは、戦後において栄は一貫して 戦争は人類に不幸をしかもたらさない」と反戦平和を主張してきたその発展としてあるものであつて、この連作を特色づけるものの一つである。

作品の虚実 作中の虚実について言えば、黒島（文中では兼島）との関係は前述したように恋愛又キの精神的交流というキレイゴトではなく、岡部小咲書簡が語るように恋愛関係であつた。灯台守の森田との愛と別れは栄の体験ではなく、別の女性のそれを借りたフィクションである。繁治（文中では修造）に関わることはいずれも事実であり、ハシカの誤診・カリエスの完治・皇太子の行幸・警察によるM社の朝鮮人一日島流し作戦等はいずれも実際にあつたことである。

#### 十五 上京・結婚・アナーキズムからマルクシズムへ

平野の評 「風」についてはこの作の概要要約を含めて平野謙「文芸時評」(54・10・27「産業経済新聞夕刊」)が問題を的確に指摘して便利なので引用しておきたい。

壺井の「風」は大正の終りから昭和の初めにいたるある芸術

家のグループの生態を田舎からでてきた新妻の視点から描いたものだ。つまり、作者自身の結婚生活の出發を中心に、林芙美子、平林たい子、黒島伝治らの若き日の面影をうつした、多分に私小説的な作品である。(中略)。

私はこのグッド・オールド・デイズの青春物語を面白く読んだ。のちにそれぞれ文壇に名をなした女流作家たちのアナーキイナ青春の一時期も、手にとるようになる。作者の人の柄のせいで、功なり名とげた出世物語のイヤミもなければ、いわゆる暴露ものいやらしさにも墮していない。しかし、こういう作柄そのものの方法的安易に、疑問をもたざるを得なかつたのも事実である。アナーキズムを信奉する一芸術家が次第にコムミュニズムに転換してゆく過程の描写は、単なる文学的興味をこえた今日の主題として、立派に成立し得る。本来芸術家というものはアナーキスティックなもののだが、それがあつた時期に共産主義に転換したものの多かつた時代の必然は一体どこにあつたのか。それは戦後ネコムシヤクシも民主主義に鞍がえした一時期を反省するためにも、文学者が本気でとりくむにたる文学的テーマである。

しかし、壺井栄の方法はどのような主題とかわりあつて、あまりに自然発生的である。私はこの作品を面白く読んだにもかかわらず、それだけではものたりない不満を、やはり抑えようもなかつたのだ。

平野が言うように、「風」は作者自身の新婚物語を中心に、あわせてその周囲にいた若き日の林芙美子や平林たい子らの破天荒な生

活を生き生きと描き出して見せている点で出色である。天衣無縫に生きるはたち前後の芙美子やたい子をこれ程に活写した作品は他に  
あるかと言えば見当たらないところにその事は明らかであろう。

もう一つはこの作の欠陥である。夫の繁治がアナキズムからコミ  
ニニズムへと転換した思想的必然は何だっただのが、一体どこにあっ  
たのが跡づけられていないところに不満をもつというものである。

平野のあやまり しかし、はつきりさせておかなければならない  
ことだが、アナキズムからコミニニズムへの転換という思想上の問題はその問題の当事者によってのみ正確、正當に説明できるものであつてそれを当事者に最も近い場所にいたからといって、その妻に説明を求めるといふのは筋違いであつて、その点で平野は誤りをおかしていることをはつきりさせておかなばならない。(無論、繁治はこの転換について後に「激流の魚 壺井繁治自伝」74・4・15 立風書房で詳述している)

繁治にかけた原点 栄のすることは、あるいはしなければなら  
ないことは、夫を口ばかり達者でころころしている人間、ふよこ  
る のままにしておくのではなくて、そもそも繁治に魅かれ、信頼  
を寄せた原点は何かと言えば「彼が時代に反逆しようとし、なにか  
を叩きこわそうとしている意志だけ」は強烈な存在感をもって信じ  
られたからであり、「そこへ希望もつないでいた」身にしてみれば、  
周辺にいるアナキスト達はそろつて働かず人のおとところをあてに  
し、リヤクを後輩に教え、女達には「不当な侮辱」を加え、これを  
「軽視」することに怒り、それを夫にぶつけるがきちんと答えては  
くれない。そのため「美しい未来のために、人間の自由のために、  
彼らの運動はあるのではないかと素朴に考え、その反逆精神に疑問

をもつことさえもあつた。そういう中で夫の思想的転換がおこり、  
論争となり、黒色青年連盟のテロで重傷を負い、コミニニズムに転  
じた。

つまり、夫は栄の質問・意見・疑問に対してまともには答えず、  
不機嫌となり、怒り、皮肉り、きちんと相対していかないことがはつ  
きりしている。戦前の左翼主義者によくある夫のいわれない妻への  
蔑視、説明責任を果たさない夫の傲慢さがある夫のいわれない妻への  
て、妻の立場からすれば説明責任の果たしようはないのだ。

犬吠埼逗留事件 上京して兄の家に身を寄せてから二人で家探し  
をするといふのは実際とは違ふ。事実繁治たち東京を食いつめたア  
ナキスト達六人が、その中に一人飯田徳太郎(千葉県銚子の生まれ  
で、土地の警察署長の息子)からの郷里銚子行きの誘い 犬吠埼燈  
台の近くに日昇館という夏向きの貸別荘があり、冬の間は誰も客は  
なく、非常に安く借りられるから、そこで共同生活をしながら原稿  
を書こうといふのだ。そして米や魚や野菜その他の物資は俺の故郷  
だからなんとか安く調達する、という大変うまい話であつた。その  
話に乗つて銚子に行つたのは飯田・壺井繁治・岡田竜夫・矢橋公磨・  
福田寿夫・平林たい子の六名だつたが着くと最初の意気込みと違つ  
て、原稿も書かず、本も読まず、毎日トランプをやる、ハナを引く、  
歌を歌う。それに飽きるとみんな揃つて散歩に出かけるという調子  
で、銚子に来たのは大正十三年の暮れであつたが、一、二週間で退  
屈し、金に困つた。やがて一人去り、二人去りして最後に繁治と福  
田の二人が残り、東京へ金策に行つた飯田と平林の帰りを待つたが  
音沙汰がなかつた。まる二日間、米粒一つ腹の中へ入れず、寝床の  
中で手の先がだんだんしびれてくるような状態に追いこまれていた

時に天国からの使いたいに現れたのが岩井（旧姓）栄だった。そして彼女はテキパキと動いて食事の支度をし、数日過すうちに繁治からプロポーズされ、その足で貸家を探し、大正十四年二月二十日貸蒲団で初夜を迎えたのである。これが事実で、繁治が後年自伝の中であかしている。

これからんで二つの特徴を指摘しておきたい。

栄の上京と繁治の告白 第一は繁治から栄に来た一枚の葉書に遊びに来ませんか（結婚しませんか、ではない）とあっただけなのにもらった栄は舞い上がってトランク一つ（繁治自伝では「風」のバスケツトと違つてこう記している）で上京し、それまでに手紙のやりとりは何度かあつたにしても雑誌の予約依頼程度の事務的なものであつて、色恋や結婚など一度も口にすることがなかつたにもかかわらず、繁治の許に押しかけ、「恋人同士」ではなかつたのに、繁治をして「ぼくはあなたと結婚したい」と告白させるには如何なる事情があつたのか。その時のことについて繁治は前出の自伝でこう記す。

わたしははじめ、岩井栄が休暇を取つてちよつと遊びにきたとばかり思つていたのに、役場をやめて出てきたことを、銚子で数日一緒に暮らしている間に知つた。（中略）それはどういう意味だろうか、と考えずにはいられなかつた。散歩の途から砂丘に腰をおろしている二人は、別にまだ恋人同士ではなかつたのに、彼女が長い勤めをやめてまでここに、わたしを訪ねてきたことは、それとはつきり言葉には出していながつたが、わたしへの何かの意思表示に違いないと、わたしはひとりて呑み

込んだ。そう思いながらも、自分の今までの根無草のような生活や、現に今自分が立つている生活の地点に考えをおよぼすと、一歩誤れば断崖の底へ転落してしまふような危機の中にあることを、あらためてかんじはじめた。（中略）

「なに、考えていらつしやるの？」（中略）「びっくりするといけないと思つて、それがなかないえないのですけど……」

「いつて下さい。」と彼女にとつてもそれを知ることが、何か将来への大きな転機を予期するかのような切実さで促した。

「ぼくはあなたと結婚したいと思つているのです。」

勇気をふるつてこうきつぱりいふと、わたしは彼女の手を握つた。

ここにおける繁治の思考過程を辿る限り、相手に深く思いを致し、その心情を忖度し、ひるがえつて相手にそう決心させた我が身の責任の重大さにためらいながらもきつぱり決断する潔さと人間的なたたかみを感じるであらう。

このように見えてくると栄と繁治の結びつきは愛の口説の多寡ではなくて、言葉にこそ出さなかつたが、本能的、直観的に相互に必要とした者同士のそれと言つてよいのではないであらうか。

もう一つは栄の積極性、行動力には驚かされる。こういう性向をもつ故に林芙美子や平林たい子の方図の無い生き方に驚きながらも自分を見失ふことなく、彼女たちを冷静に観察して描き出すことに成功しているものと思われる。

十六 弾圧・転向 おのれは何者か

「空」では以前のアナキスト達とは全くの別世界 労働組合の人々が中心で、皆真黒になって働き、ほころびをみるとつくりつてやり、年中腹をすかせてくるので飯を与え、月に八斗の米代を請求された事もあがるが、プロレタリア文学運動の昂揚期には生きがいであった。 繁治も四年に三回刑務所送りとなり、その間栄は戦旗社に勤めて雑用係となり、預り子をかかえて、月一度の面会に通った。 栄の他の社に来ている女達の殆どは小説家・詩人・役者など有職の才能があり、うらやましかつたが栄には何もなかった。 弾圧は激化し、夫は権力に頭をたれてもどってきた。

「花」は連作の最初に書かれたものだが、茂緒という名前にまつわるいじめの問題、父の渡海船の荷運びの重労働の手伝いから郵便局にとびこんで雇ってくれと頼んで初任給二円から三〇円まで十年間勤め、その間過労から肋膜炎で倒れたが、家のため勤めは止められず、恋人の灯台守森田も親友の美代の体当りで奪われ、結婚後三年で美代は錯乱し入院、修造と平凡に結婚するが、今は二回目の刑務所入り、茂は小説を書き始めるというのが主要なトピックでそれらは言ってみれば、おのれは何者なのか を原点到立ちもどつて問う試みであったことは十分推定されるのであるが、作者自身、「連作小説 風」(54・12・5 光文社 カッパブックス)として単行本にまとめたとき、その「あとがき」でこの四篇はまとめる順序がきめにくく、「こんなに置きかえてみても、不自然なものを感じる。おもにそれは形式からきている不自然さのように思う。」と自覚し

ているようにいびつなものとなっているゆえに、その後の展開、発展にも影響して続編が書かれることはなかったのだと思われる。

ただし、このあと新しく「転々」と題する長編小説が連載されるのであるが、それについては発表の当該年月の項で述べることにしたい。「花」の評としては花田清輝の「それにしても、初恋の話を、デコデコと花をあしらってかこうなんて根性は押しがふといね。まるでカルピスにサッカリンをいれたみたいだ。」<sup>15</sup>が有名。

\* 本稿の年月の表記は原則として西暦とし、最初の二桁(19・20)を省略している。

\* 作品の収録状況を示す略称は次の通り。  
単 単行本

作 筑摩書房版壺井栄作品集全25巻

全 筑摩書房版壺井栄全集全10巻

新全集 文泉堂版壺井栄全集全12巻

児文全集 講談社版壺井栄児童文学全集全4巻

いずれにも未収 単・作・全・新全集に未収。

注

1 戒居仁平治「壺井栄年譜」(95・1・10)「壺井栄伝」壺井栄文学館。

2 栄「四つの作品の舞台」(56・6・5)「壺井栄作品集7 あとがき」筑摩書房。

- 3 栄「あとがき」(54・12・15「紙一重」中央公論社)。
- 4 中村光夫が「壺井栄の『紙一重』」(53・11・6「毎日新聞」)で、この点にふれて、「終りの方で急に患者同士の殺人事件がおこつたり、共産党と警察がからんできたりするのは一寸唐突で不自然だね。あんな「事件」などださずに、もっとどろ沼のような病院の雰囲気徹底的に書いた方がよかつた。」と指摘するのは正鵠を射たものとして首肯されるのである。
- 5 「小犬」の表記が初出では「仔犬」であるが、「あしたの風(創作・随筆集)」(53・1・20全日本社会教育連合会)に初収後「小犬」に改められたのでそれに従つた。
- 6 壺井家に新聞の切り抜きが現存し、「27・10・21」と日付も判明しているが、紙名は未詳。
- 7 別に「さざんかの道で」(54・1・4「神戸新聞」と題する作品もあるが、これは「さざんかの花咲く道で」を表題も本文も短縮して掲載した短縮版なので、こちらは採らなかつた。なお、「児文全集」は「さざんかの花咲く道で」の存在を知らなかつたため、「さざんかの道で」として短縮版を再録しているが、正しく改めるべきである。
- 8 例えば、栄「落ちてゆく」(57・7「文芸春秋」単・作・新全集に収録)。
- 9 栄「腫疲れ」(57・1・15「壺井栄作品集」9「あとがき」筑摩書房)。
- 10 こうした太田洋子への反撃、アテツケには当時二人の間にあつたトラブルが作用しているかもしれない。佐多稲子氏から小生への直話(前出の軽井沢別荘での栄についての回想談聞書
- 11 による)によれば、この頃洋子は栄から金を借りてそれを返し  
たと言うが、栄は返してもらつていないというメモ事があつた  
という。それが尾を引いているかもしれない。なお佐多氏はこ  
の件についてはおそらく栄は流行作家でパンパン稿料が入つた  
ので返納されたのを忘れたのではないかという立場を示してお  
られた。
- 12 閲覧にご協力たまわつた小豆島町内海図書館の吉川照美氏に厚  
く御礼申上げる。なお、この書簡は現在壺井栄文学館蔵。  
拙稿「壺井栄の『青春劇』」新発見の岡部小咲書簡は語る」  
(92・9・3「東京新聞夕刊」)。同「隠された真実 壺井栄に  
おける作家転身の意味」(94・2・15「言語と文芸」110号  
桜楓社)。
- 13 栄「あとがき」(56・8・5「壺井栄作品集」12「風」筑摩書房)。
- 14 壺井繁治「激流の魚 壺井繁治自伝」(74・4・15「立風書房」)。
- 15 花田清輝「文芸時評 シラミツぶし」(54・10「新日本文学」)。